

救われた目的（１）

2009.8.23（日）

西軽井沢福音センターにて
ベック兄メッセージ（メモ）

引用聖句

詩篇 118 篇 14 節

主は、私の力であり、ほめ歌である。主は、私の救いとなられた。

イザヤ書 12 章 2 節

見よ。神は私の救い。私は信頼して恐れることはない。ヤハ、主は、私の力、私のほめ歌。私のために救いとなられた。

ルカの福音書 1 章 4 5 節

「主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう。」

今朝の題名は、『救われた目的とはいったい何か』ということです。確かに、救われることは考えられないほど大切です。これよりも大切なことはありません。しかし救われた目的とはいったい何でしょうか。

私たちの人生において最も大切なことは、救い主を知ることです。救い主についていろいろなることを知るのではなく、「救い主ご自身を知る」ことです。イエス様を体験し、味わい知ることです。救いの神を知るようになった人の証しとは、今読まれたように次のようなものです。ダビデは、

詩篇 118 篇 14 節

主は、私の力であり、ほめ歌である。主は、私の救いとなられた。

救いとは、「救い主を持つ」ことです。イザヤも全く同じことを告白しました。

イザヤ書 12 章 2 節前半

見よ。神は私の救い。私は信頼して恐れることはない。

救い主を持つこととは、心配から、不安から解放されることです。

イザヤ書 12 章 2 節後半

主は、私の力、私のほめ歌。私のために救いとなられた。

二千六百年前に書かれたことばです。

イエス様を生んだマリヤは、次のように言ったのです。

ルカの福音書 1章47節

「わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。」

救いの神を知ることによって初めて、私たちはこの地上において本当に満たされた生活を送ることができます。満たされた生活を送るために、永遠のいのち、主なる神との平和、罪の赦しが必要です。つまり、イエス様が私のことを心配し、導き、そして守ってくださるという確信が、生活の土台とならなければなりません。そして、私たちは死んだ後、永遠に主イエス様との交わりに入り、交わり続け、栄光を共にすることになるという確信こそ、最高の宝物です。「いつまでも主イエス様と共にいる」という事実について考えると、本当に言い表わす言葉もありません。主を礼拝せざるを得ないのではないのでしょうか。

このような人間の永遠の栄光というものは、人間の霊が新しく生まれ変わることによって初めて可能となるものですから、そのことこそ私たちの人生において最も大切なことにほかなりません。けれど聖書は、「新しく生まれ変わったばかりのキリスト者は、幼子のようなものである」と記しています。

ペテロの手紙・第一 2章2節

生まれただけの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。

とあります。乳飲み子は、いつまでも乳飲み子の状態にとどまっているのではなく、成長しなければならぬということは、言わなくても明らかなことです。

コリントにいる人々は確かに救われたのですが、パウロは彼らの信仰の状態を悩みました。

コリント人への手紙・第一 3章2節

私はあなたがたには乳を与えて、堅い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、今でもまだ無理なのです。

パウロは、コリントにいる信者たちに対して、乳飲み子にミルクを飲ませることだけしかできなかったのです。牛乳は確かに消化のために最も良い食べ物です。しかし、それは救いの基礎を形成するだけのものにほかなりません。コリントにいる兄弟姉妹は、例えば、エペソにいる兄弟姉妹や、コロサイにいる兄弟姉妹に対してパウロが書き送ったような、高度な摂理を理解することができなかったのです。

このようにパウロは、多くの信者に対して、母親がその子どもを育てるように振舞ったのです。しかしパウロの目的はいつまでも乳飲み子の世話をすることではなく、信者たちが「全き人」となること、でした。エペソ書4章から2、3節読みます。

エペソ人への手紙 4章13節から15節

ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。それは、私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもてあそばれたりすることがなく、むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。

とあります。

イエス様を持つことは、確かに素晴らしいことです。けれど、それだけでは決して十分ではありません。むしろ、イエス様が私たちが御手の中に置かれることによって、私たちの主として、私たちの全てをご支配なさることこそ大切です。イエス様を知ることは恵みです。しかし、私たちが主イエス様のために用いられる器となるためには、イエス様を私たちの主として、実際的に経験することが大切なのです。したがって私たち信者は、全ての生活が絶えずイエス様のために営まれているように、「主に従って」歩まなければなりません。

ですから私たちは、本当の信者の生活の使命について正しく理解しなければならないのではないのでしょうか。別の言葉で表現すれば、私たちは「永遠の勝利の冠」のために生きていくことが大切なことである、と言えるのです。

新約聖書の中では、この地上における普通のいわゆる競走と、私たち信者の霊的、信仰的な戦いとが対比されています。したがって競走あるいは戦いは、私たちの信仰を励ますためのものとして考えられている、ということが分かります。

それゆえ、私たちはまず初めに、その当時の（二千年前の話しですが）、ギリシヤ及びローマで行なわれたスポーツについて、少しばかり考えたいと思います。もちろんスポーツについて考えようと思えば、毎日毎日野球についていろいろなことが言われていますが、当時ギリシヤ人は、ただ単に精神的な訓練だけでなく、肉体的な訓練をも重要なものと考えていたのです。「健全な精神は、健全なる肉体に宿る」というように一般に考えられていました。そのために、その当時のギリシヤ人の男も女も七歳になると激しい運動をさせられたのです。小さい時からそのような訓練を受けたために、大人になった時には、非常に美しく健康な体が形作られたのでした。それはその当時の彫刻などを見れば良く分かります。「美と徳とは切り離すことの出来ないものである」とは、その当時のギリシヤ人に共通した考え方でした。したがって、美しい心と健全な身体とが理想とされていました。ギリシヤ語以外の言葉では、良いものと美しいものとは区別され、別の表現をもって表わされるのですが、ギリシヤ語ではそれらの言葉が同じ語源から作られています。

このようにギリシヤでは善と美とが理想とされましたが、これに対してローマでは正義と力とが理想とされていました。そしてそれにもかかわらず、それぞれの違った理想は、

共にスポーツによって達成されると考えられたのです。

しかし、ギリシヤやローマのスポーツは、常に偶像礼拝と結びついていました。例えば、オリンピック競技は、ゼウスの神の名誉のために行なわれました。別の競技はコリントの近くで行なわれたために、海の神ポセイドンを誉めたたえるために開かれたのです。またある競技は、太陽の神アポロを記念するために行なわれました。オリンピアでは、中心にゼウスの祭壇が築かれており、全ての競技が終わった後、この祭壇の前で華やかな行進が繰り広げられたのです。ローマではスポーツを始める前に、神々の偶像が車に乗せられて競技場を一周することが慣わしとされていました。この競技は非常に有名なので、人々はいろいろなことをよく知っていたのです。したがって、パウロもその競技についてはよく知っていましたが、それが偶像礼拝であるために、彼は決してそれに参加したこともなければ、また見たくもなかったでしょう。

そのようなわけで、確かにこのスポーツは偶像崇拜でしたが、パウロは一つの例として、この競技を使って説明したのです。けれど、パウロは決して妥協したのではなく、初めから終わりまで真理を証ししたのです。パウロは、ギリシヤ人の考え方やローマ人の考え方をよく知っており、それらの人々に分かりやすく説明するために、このような例を用いたに過ぎません。

パウロがこのような一つの例を用いて宣べ伝えた福音は、「イエス様は救い主である」ということにほかならなかったのです。イエス様こそ、罪の債務と罪の力から解放することがおできになる救い主であり、「主」です。このイエス様を信じた者は、新しいいのちを得ることができ、あらゆる問題を解決することができ、その喜びと力とが与えられるのです。主は勝利の生涯、即ち栄光に満ちた永遠の目標と、生き生きとした望みを、私たちに与えてくださるのです。それゆえ主イエス様こそ「救い」であり、主なる神の力の現われにほかなりません。イエス様がご自身を現わされる時に、暗やみは完全に打ち負かされるのです。

初代教会の証しは、ローマ書 1 章 1 8 節に記されています。

ローマ人への手紙 1 章 1 6 節

私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。

福音とは「救いを得させる神の力」そのものです。けれどそのことは、イエス様と結びついている時にだけこの力が現われる、ということをおぼわすはなりません。聖霊がこの力を私たちに与えるようにとりなしておられます。

しかし大切なことは、私たちが、全てをイエス様に委ねることです。任せることです。イエス様を信じることは、即ち勝利の戦いを勝ち取ることを意味します。ですから私たち

は、この力によって主なる神の目的である「勝利の冠」を得るために走ることを急がなければなりません。このように、私たちにとって主イエス様から与えられた力を用いて、主の目的に向かって走る必要があります。したがって救われた者の生涯は、おもむくままの散歩ではなく、「まさに勝利の冠を得るための戦い」にほかなりません。

私たちは自分自身の力によって戦うのではなく、主の恵みと主の憐れみによって与えられた「上からの力」によって、戦わなければなりません。

新約聖書の中には、ギリシヤ、ローマ時代の競技のことが描かれていますが、いったいこれは何のために書かれたのでしょうか。それは私たちにとって、救われた者であるということだけでは決して十分ではないからです。それは単に初めの第一歩にしか過ぎません。むしろ「永遠の戦いの目標」が、重要な問題となるのです。そのために、私たちは今以上にずっと主イエス様に信頼し、イエス様に全てを委ねなければなりません。私たちは真剣に、そして喜びに満ちて主に従って行くべきです。私たちは主の証し人として用いられなければならないのです。私たちは主のご目的を目指して走り、イエス様において上に召してくださる主の勝利を得ようと努めるべきではないでしょうか。全てのこの世のものは過ぎゆき、はかないものです。ただ永遠なるものだけがいつまでも存続するのです。そのために永遠なるものを目指して、私たちは一生懸命にならなければなりません。ですから、私たちがこのような「信仰の戦い」をするためには、私たちが持っている霊的なエネルギーを全部出し切って、イエス様のために生きなければなりません。

私たちが目指して走っている目標は、本当に素晴らしい栄光に満ちています。私たちが、「忠実な主のしもべ」として最後まで奉仕するならば、それによって得られる報いは大きいのです。生きておられるイエス様は、私たち信者に霊の力を十分に備えていてくださいます。イエス様は、私たちに大胆な証しをする勇氣と、信仰の確信と、確実なる勝利とを与えてくださいます。

パウロが言ったように、「信者の生涯とは、言わば組みうちのようなものである」。つまり、悪霊に対する戦いです。ちょっと読んでみましょう。よく知られている箇所です。エペソ人への手紙 6章になります。本当は毎日読むべき箇所かもしれません。

エペソ人への手紙 6章10節から17節

終わりに言います。主にあって、その大能の力によって強められなさい。悪魔の策略に対して立ち向かうことができるために、神のすべての武具を身に着けなさい。私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。ですから、邪悪な日に際して対抗できるように、また、いっさいを成し遂げて、堅く立つことができるように、神のすべての武具をとりなさい。では、しっかりと立ちなさい。腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てを着け、足には平和の福音の備えをはきなさい。これらすべてのものの上に、信仰の大盾を取りなさい。それによって、悪い者が放つ火矢を、みな消す

ことができます。救いのかぶとをかぶり、また御霊の与える剣である、神のことばを受け取りなさい。

別の言葉で言えば「競技場で走る競走」のことです。もう一箇所ピリピ書の3章12節、これもよく引用される箇所です。12節からお読みいたします。

ピリピ人への手紙 3章12節から14節

私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得ようとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕えたなどと考えてはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。

私たちは、このようないろいろな力に対して「霊の戦い」をしなければなりません。ある場合には、救いのかぶとをかぶり、御霊の剣を持って白兵戦を行ない、またある場合には、火の矢が飛ぶ遠隔地の戦争を行なわなければなりません。

エペソ人への手紙 6章16節、17節

これらすべてのものの上に、信仰の大盾を取りなさい。それによって、悪い者が放つ火矢を、みな消すことができます。救いのかぶとをかぶり、また御霊の与える剣である、神のことばを受け取りなさい。

そこでは、打ち砕かれた悪魔の要塞が問題です。同じくパウロは、コリントにいる兄弟姉妹に書き送りました。コリント第二の手紙の10章4節からお読みいたします。

コリント人への手紙・第二 10章4節から6節

私たちの戦いの武器は、肉の物ではなく、神の御前で、要塞をも破るほどに力のあるものです。私たちは、さまざまの思弁と、神の知識に逆らって立つあらゆる高ぶりを打ち砕き、すべてのはかりごとをとりこにしてキリストに服従させ、また、あなたがたの従順が完全になるとき、あらゆる不従順を罰する用意ができています。

私たち主の恵みによって救われた者は、その意味で戦士であると言えます。ですから、パウロは愛弟子であるテモテに、殉教の死を遂げる前に書いたのです。

テモテへの手紙・第二 2章3節

キリスト・イエスのりっぱな兵士として、私と苦しみをともにしてください。

イエス様のためにご奉仕することは、即ち「聖なる戦い」そのものです。イエス様のしもべとして証し人として固く立とうと思う者は、この戦いの意味を自ずから感じ取るはずで、私たちがイエス様とともに行こうとする時には、この世の未信者から強い攻撃を受

けることが明らかです。何故なら、それがイエス様を受け入れない者、即ち生まれながらの人の性質だからです。彼らはみな、口を揃えて反対します。当時もそうでした。ルカ伝 19章14節を見ると、次のように書かれています。

ルカの福音書 19章14節

「しかし、その国民たちは、彼を憎んでいたのです、あとから使いをやり、『この人に、私たちの王にはなってもらいたくありません。』と言った。」

即ち「私たちは、主イエスが王となることを望んでいません」と。これこそ生まれつきの人間が語る言葉です。

今まで私たちは、おもに外面的な敵に対する戦いを考えてきましたが、内面的な戦いについて考えましょう。

ここで、大切な聖化と言う言葉が多く使われますが、それは、私たち人間が小さくなり、その代わりに主イエス様の姿が大きくなることを意味します。即ち、いつかは古きものがなくなり、新しいものがもたらされることとなります。ヨハネ伝 3章30節です。大切な箇所です。

ヨハネの福音書 3章30節

「あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。」

有名なガラテヤ書 2章20節、パウロの勝利の秘訣についての箇所でしょう。

ガラテヤ人への手紙 2章20節

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

この箇所を読むといつも嬉しくなります。徹底的に信じる者を迫害したパウロが「私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子」と言うようになったのは、素晴らしいことではないでしょうか。

イエス様の救いにあずかるようになった兄弟姉妹の中には、古い性質と新しい性質とありますが、それらの性質が並存しているというよりも、むしろ対立しているという表現を使った方がよいでしょう。

ガラテヤ人への手紙 5章17節

なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。

このような内面的な戦いは、私たちの肉体が存在している限り絶えず行なわれるのです。しかしながら残念なことには、実際問題として救われた多くの人々は、これら二つのものが対立し合うというよりは、むしろ妥協していい加減になってしまうことに慣れてしまっているのではないのでしょうか。その結果、聖霊の導きに対して鈍感になったり、優柔不断な態度のために証しをする力がなくなったり、この世のことばかり考えたりして、私たちの思いや望みが全く塵にまみれてしまうのです。このような妥協した生活との別れは、早ければ早いほど簡単であり、徹底的にすればするほど良いことは言うまでもありません。

私たち主の血によって買い取られた者は、常に競技をする者であるべきです。パウロは、
テモテへの手紙・第二 2章5節

また、競技をするときも、規定に従って競技をしなければ栄冠を得ることはできません。

と、愛弟子であるテモテに書いたのです。

ここで使われている競技の規定とは、定められたコースを忠実に公正に守らなければならないという決まりのことを言うのです。例えばマラソンをする場合に、定められたコースを走らず、楽をしようと思って最短距離を走ってゴールインしても、勝利の栄冠は得られません。

これは地上の競技ですが、信仰の戦いにおいても、イエス様を全く信頼し、全てを主に委ねることが要求されます。イエス様は、心からの献身を望んでおられます。決して妥協することは許されません。

いずれにしても、古き性質と新しい性質とがごちゃごちゃになってしまうことは退けなければなりません。この戦いは真剣な戦いであり、イエス様に対する信仰をゆるがない心で持ち続け、主に従って行かなければなりません。

使徒行伝の中で、次のような箇所があります。

使徒の働き 1 1章2 3節

彼はそこに到着したとき、神の恵みを見て喜び、みなが心を堅く保って、常に主にとどまっているようにと励ました。

常に主にとどまっていた、と。

このように私たちは、信仰生活の一面として、主のものとなった兄弟姉妹の責任について考えてきました。

そこで、これから信仰生活のもう一つの面についてちょっと考えたいと思います。

確かに自分の意志で決定することは大切ですが、主の力によらずに自分の力で栄冠を勝ち取ろうとしたり、古い性質に対して戦おうとすることは正しくありません。

では、いったい主のものとなった兄弟姉妹の目印となるものはいったい何でしょうか。四つです。

- 一番目、主のみことばである聖書を愛し、
- 二番目、信じる者の「主にある交わり」を求め、
- 三番目、ことごとくに感謝をもって、祈りと願いとを捧げ、
- 四番目、悪いと分かっている物事や人々から離れる。

しかし、残念なことに、せっかく救われた多くの兄弟姉妹は、自分の利益を考え、この世の愛を求め、他人に対して冷たく接したり、心がかたくなであったり、生き生きとした祈りの力を体験することがなく、証しにも力がなく、みことばを尊重せず、罪に負けてしまうのです。いったいこのような状態から、逃げ道があるのでしょうか。もしイエス様が私たちの中で勝利を治めておられるなら、同時に罪の力に対しても勝利を得ていることを意味するのです。ネヘミヤ記8章10節に、
ネヘミヤ書 8章10節後半

「悲しんではならない。あなたがたの力を主が喜ばれるからだ。」

とあります。

「主を喜ぶことは、あなたがたの力です」。即ち、毎日の生活の中で勝利を得る力にほかなりません。私たちがイエス様を見上げ、イエス様に従い、イエス様にとどまるならば、罪に対する勝利の問題は実際に解決されることとなります。その結果、私たちは喜んで光の中を歩むことができるようになります。

今まで述べてきたことを要約すると、まずしなければならないことは、勝利の栄冠を得るために「力を尽くして走る」ことであり、次に「主から与えられた恵み」を素直に従順に受け取ることです。つまり栄冠を得るために、私たちは決して中途半端な、曖昧な態度をとるのではなく、全てを主に委ね、イエス様により頼むことが大切です。

最後に、いったい誰が勝利の冠を得ることができるのでしょうか。

テサロニケ第一の手紙2章19節を読むと、パウロは次のように書くことができたのです。このテサロニケにいる信者たちは、パウロの誇り、パウロの喜びでした。

テサロニケ人への手紙・第一 2章19章

私たちの主イエスが再び来られるとき、御前で私たちの望み、喜び、誇りの冠となるのはだれでしょう。あなたがたではありませんか。

このテサロニケにいる兄弟姉妹は、パウロの奉仕によって主に導かれただけでなく、「主の恵みによって成長した者」で、「豊かな実を結ぶ者」となったのです。その意味で、彼らはパウロの喜びでした。

旧約聖書をもう一箇所読みます。

思慮深い人々は大空の輝きのように輝き、多くの者を義とした者は、世々限りなく、星のようになる。

とあります。

これに反して、一人もイエス様のみもとに導けなかった者は、どうして勝利の冠を得ることができるのでしょうか。決してできません。毎日曜日に言っていますが、一つの大切な手段として、集会の本を配ってください、ということです。今日も、何百冊持っていてもいいです。みな分かっているでしょう。無料ですから、たくさん運んで行ってもらいたいと願います。結局みことばとは、種です。回心の種です。人々が導かれ救われなければ、それは多くの場合は「信じる者の責任」です。未信者の不信仰ではありません。信じる者の不信仰です。

ギリシャ、ローマ時代の競技は大勢の観客が集まりました。セルクスというローマの競技場では、パウロの時代に約二十五万人集まったのです。それから4世紀になると三十八万五千人の観衆が集まったとあります。それに対してこんにち、私たちの信仰生活の戦いは、ただ単に周囲の人々から見られているだけでなく、イエス様を初めとする目に見えない世界からも見守られていることを忘れてはなりません。

ローマ時代の競走は、人間と人間との力を競い合うスポーツから、次第に人間と野獣との戦いになっていったのです。例えばライオンとの格闘は、初めは犯罪者だけに戦わせたのですが、ネロの時代になると、イエス様のものとなった人々に対しても戦わせ、ひどい場合には、イエス様を信じる者に油をかけて火を付けるなども平気で行なわれたのです。

パウロはローマ書16章の中で、二十五人の兄弟姉妹の名前をあげて、それらの人々について語っています。

パウロはまず、ローマ書16章3節と9節で、「キリスト・イエスにある私の同労者」と言い、次に、5節、8節、9節、12節で、「主にあって愛する兄弟姉妹」と言い、10節、「キリストにあって練達した兄弟」とも言い、更に13節、「主にあって選ばれた兄弟」とも言っています。

ここに名前をあげられた兄弟姉妹の大部分は、疑いもなくパウロ自身と同じように迫害され、殺されました。

この手紙が書かれてから6年ほどたって、特にローマを中心としてイエス様のものとなった兄弟姉妹に対する大きな迫害が始まりました。しかしながら、そのような大きな迫害にかかわらず、これらのキリスト者は、少しも死を恐れることなく、静かな内にもイエス様を信じる喜びをもって、その苦しみを甘んじて受けたのです。

しかし、残念なことには、それと反対に迫害や死を恐れたために信仰から離れ、脱落していった信者もありました。例えば、ディオクレティアヌス皇帝の時に行なわれた迫害に

ついて、その当時のことを記している古文書の原典が、次のように記しています。

「七十二歳になる老人は、皇帝の命令に服従して偶像崇拜を行なってしまった」。つまり彼は、主イエスのことを思わず、人のことを思ったためにこの世と妥協して信仰から離れてしまった。その当時のローマの秘密警察は、その老人が偶像崇拜をしたことを見たというように証明しています。この古い文書が記されていることは、何という恐るべき悲劇でしょう。あるキリスト者は、主イエス様を拒んでこの世と妥協し、殺されないために自分が本当に偶像崇拜をしているところを役人に見てもらい、それを公に証明してもらったのです。このことは、現在のキリスト者が行なう証しとどのような関係を持っているのでしょうか。いったい私たちの信仰はどうなのでしょう。もう一箇所読みます。マタイ伝の10章32節、33節です。

マタイの福音書 10章32節、33節

「わたしを人の前で認める者はみな、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。しかし、人の前でわたしを知らないと言うような者なら、わたしも天におられるわたしの父の前で、そんな者は知らないと言います。」

もし、イエス様が「知らない」と言われるなら、おしまいです。

イエス様のものとなったすべての兄弟姉妹の持っている使命は、まさにイエス様ご自身を証しすることにほかなりません。救われた目的はそのことなのです。イエス様が私たちの中で大きくなればなられるほど、私たちも真剣にイエス様を証しせざるを得なくなります。つまり、私たちが外に向かって証しをするということは、すべて主との関係にかかっています。私たちが聖霊によって満たされれば満たされるほど、救われている事実を、感謝と喜びを、一人でも多くの人々に告げ知らせたいという気持ちが強まってきます。

私たち一人一人が、主イエス様は私たちにとっていかなる意味を持っているかを明らかにしなければなりません。イエス様のものとなった兄弟姉妹にとって証しをすることは、誰にでもできることです。そして、証しをするということは、どこでもできることです。言葉や行ないで証しをするということは、その人の関係が良いとか悪いとかいうことは全く関係ありません。イエス様が私たちの心の目を開いてくださることができれば、私たちはその時こそ、感謝と喜びとをもって大胆にイエス様を証しすることができます。

しかし証しをするということは、常に戦いと結びついています。信仰の道は戦いと献身を通して進みますが、その結果は、素晴らしい栄光に満ちた勝利の生涯です。私たち主の者が、すべてを主に委ねることができるならば、豊かな実を結ぶことができるのです。

このように信仰とは、「常に十字架の道と結びついていること」を忘れてはなりません。十字架の死と、復活を経験されたイエス様との交わりだけが、あらゆる信仰生活と証しのためになくしてはならない原則です。

イエス様は、かつて言われました。「あなたがたはわたしの証人です」と。私たちは、証し人なのでしょうか。私たちは、家庭や学校、職場、或いは故郷において本当の証しをしているのでしょうか。本当の証人は、力、勇気、知恵、愛に満ちたものでなければなりません。前もって主にすべてを委ね、証しの生涯を送った者でなければ、誰も主とともに生き、主のために死ぬことはできません。私たちの日常生活の中で、忠実にイエス様を証しし続けなければなりません。続けなければ、大きな問題が必ず出てきます。

イザヤが「主よ。私はここにおります。どうか私を導いてください。用いてくださいと願ったのは、彼の祝福された生活の秘訣だったのではないのでしょうか。私たちも同じ態度をとるなら、本当に幸いです。

了